

令和6年度 奈良市立伏見南幼稚園 研究実践概要

園長名 西野 かおり

全園児数 21名

1. 研究主題 「心ときめかせ 主体的に活動する子どもをめざして」
～人・もの・こととの出会いの中で～

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

子どもを取り巻く環境が日々変化する中、本園は園児数減少傾向にある。また、人との関わりが希薄で、生活経験や感動体験も少なくなりつつある。身近な“人・もの・こと”との関わりの中で、心ときめく豊かな体験をし、友達と思いを出し合い葛藤や挫折を乗り越えたり、達成した喜びを味わったりすることなどを積み重ねることが大切であるのではないかと考える。今年度も引き続き、園生活の中で、子ども達の心ときめく姿を捉え、主体的に活動する子どもを目指すために保育内容の見直しや工夫、保育者の援助や環境構成の在り方を探っていきたいと考えた。

4. 具体的な研究内容

① 研究のねらい

子どもが遊び、生活する中で、心ときめく瞬間を捉え、主体的に活動するための保育内容や援助、環境構成の在り方を探る。

② 研究の重点

- ・保育者間の同僚性を高め合いながら、研究主題について共通理解し実践に取り組む。
- ・子どもの興味や関心を丁寧にみとり、心ときめかせ 人・もの・ことと子ども自ら主体的に関わろうとしている姿を捉えると共に、その要因について探る。
- ・子ども一人一人の発達段階をふまえ、子ども達の願いや思いが実現できるよう、保育者の援助や環境構成の在り方について再構成を行いながら、学びが深めるような保育内容の工夫に取り組む。

③ 活動の方法

【事例1】4歳児「みんなでお風呂づくり」(11月)

ねらい ○ 砂や土の感触や性質に興味をもち、遊びを楽しむ。

○ 友達の存在を身近に感じ、一緒に遊ぶ楽しさを味わう。

数日前からA児B児が砂場に穴を掘り、工事現場に見立てて遊ぶ姿があった。遊びの振り返りで、友達が大きな穴を掘っていることを知ったC児は、工事現場の遊びが気になり砂場にやってきた。

(.....心がときめく姿)

子どもの姿 保育者の援助・環境構成	心がときめく姿からの 見取り
A児B児 砂場に穴を掘って遊んでいる。 C児 「私も手伝ってあげるわ!」と言って、スコップを手に取り一緒に掘り始めた。保育者は、子ども同士の会話に耳を傾けながら、一緒に穴を掘って遊ぶことにした。 C児 「なんかお風呂みたいやなあ!」とつぶやいた。 A児 「うん。これお風呂やで。もっと掘ろう!」と嬉しそうな表情を浮かべた。 その様子を近くで遊んでいた数名の友達が「うわあ!これお風呂?私もやりたい!」などと口々に話しながら一	友達が掘った大きな穴を見て、興味をもち、自分もやってみたくと思った。 友達が穴を見て「お風呂みたいやなあ!」と言った言葉の表現が面白く、お風呂づくりにしようと思いが動いた。

<p>緒に穴を掘り始め、どんどん掘り進めていく。 <u>保育者は、「すごい！お風呂みたいに大きいね。」と言っ</u> <u>て、思いに共感する。</u> C児 「先生、みて！土の色がちがう！」と走って保育者 <u>を呼びにきた。土の色の变化に興味津々な様子。</u> 保育者は、「ほんとだね！土の色がここから変わっている ね。不思議だね！」と、子ども達の発見を受け止める。 D児 「もっと掘ろうよ！」と言いながら、土の色が変わ っていた穴の側面を掘っていく。 <u>すると今度は、根っ子のようなものが出てきた。</u> <u>「うわあ！おいもや！」と喜ぶ声に他の子ども達が集ま</u> <u>ってきた。</u> 友達の体につながり、力を合わせて「うんとこしょ！どっ こいしょ！」と根っ子を引っ張り、おいもが出てくるカラ クワクワしながら掘ることを楽しんでた。</p>	<p>普段、関わりが少なかった友 達がきてくれたことが嬉しか った。 発見したことを保育者や友達 にも伝えたい。 土から偶然、根っ子が出てき たことで、芋掘りを連想し、 みんなで協力して楽しく根っ 子を引っ張ることができた。</p>
---	--

<反省・評価>

- ・たくさんの友達が一緒に何かを作って遊ぶことは少なかったが、遊び後の振り返りを繰り返して大切にしてきたことで、関わりが少なかった友達の姿にも気付くことができるようになってきた。また、保育者が子ども達の様子をしっかりと見守り、タイミング良く関わりながら共感や受け止めに丁寧にしていくことの大切さを改めて感じた。
- ・たくさんの友達が力を合わせたことで、穴を深く掘ることができ、土の色の变化に気付くことができた。また、偶然でできた根っ子を見て、芋掘りという共通体験を思い出し、自然と友達同士がつながり、根っ子を楽しく引っ張ることができた。

【事例2】4歳児「トロトロチョコレートづくり」（12月）

ねらい ○ 土の性質に興味をもち、試したり取り入れたりして遊ぶことを楽しむ。

○ 自分の気付いたことや感じたことを伝えながら遊ぶ。

雨上がりの砂場に土の表面が粘土のようにヌルヌルしているところを見つけたA児。その上澄み部分をスプーンですくい、集めている。そこに水を入れ「すごいトロトロチョコみたいになった！」と興奮した様子で保育者のところに見せにくる。次の日もA児は同じものをつくろうと張り切って、園庭の砂場へ走っていった。しかし、昨日と同じ質の土が見つからない。しかたなく、A児は、スプーンで砂場の砂に水を入れて、チョコづくりをはじめたが、思っているものができず、違う場所の砂や土を集めて、何度も繰り返す様子が見られた。

(~~~~~ 心がときめく姿)

子どもの姿 保育者の援助・環境構成	心がときめく姿からの 見取り
<p>A児 「先生！トロトロチョコできたよ！」と保育者のところに走ってきて出来上がったチョコをスプーンですくい、<u>トロトロ具合を見せにきた。「すごいね！どうやって作ったの？先生も作り方教えてほしいな！」と声を掛け、一緒に作ることにする。</u> A児 「いいよ！」と言い、丁寧に説明を始めた。 A児 「砂場の土は石がいっぱいやからあかんねん！」「<u>この土を入れたら石があんまりないからトロトロチョコできるねん！」</u>と言いながら、砂場から少し離れた所の土をスプーンでかき集めた。 A児 「サラ砂を少し入れるともっとトロトロになるよ！」 <u>と言いながら、保育者の容器にサラ砂を入れた。</u> 「あとはお水を入れたらいいの？」と保育者が聞く。 A児 「うん。だけどスプーンで入れないとダメやねん」と <u>言いながら保育者が入れる水の量をじっと見ている。</u> A児 「ストップ！」合図を出した。 その水の量も適量で美味しそうなトロトロチョコレートができた。 その後、「Aちゃんはトロトロチョコ名人やで！」と友達に認めてもらい、嬉しそうに友達に教える姿が見られた。</p>	<p>繰り返し試すことで、トロトロさを実現することができた。 いろいろな場所の土を使って作ることで、トロトロにするためには、石が少なそうな土が最適であることに気付く。 水の量は適量に入れるのではなく、スプーンで少量ずつ加えると失敗せずにうまくいくことが分かった。 うまく作れたことを友達にも認めてもらい、満足感を味わえた。</p>

<反省・評価>

- ・雨上がりにヌルヌルした土が偶然にできたことが、土の性質に興味をもち始めるきっかけとなった。また、天気の影響で思い通りの土が手に入らず、困っていたA児であったが、そのことがきっかけとなり、自分なりにいろいろと考え、代替りのものを再現したい！と試すことができた。繰り返し試したことで、たくさんの気づきが生まれ、友達にもトロトロになるポイントを丁寧に言葉にしながら作り方を教える姿が見られた。
- ・A児が試行錯誤を重ね遊んでいる姿を十分に認め、時折、声を掛けながら気持ちが続くように見守ったことで、トロトロチョコが再現できた喜びや達成感を味わうことができた。

【事例3】 5歳児 「ダンゴムシ、紙コップ 食べる!？」 (6月)

- ねらい ○ 友達とのつながりを楽しみ、思いを伝え合いながら遊びを進めようとする。
 - 身近な自然に興味をもち、気づきや発見を楽しむ。
- (保育者の援助・環境構成____ 心がときめく姿_____)

心がときめく姿からの見取り

ダンゴムシを飼育していたある日、保育室に「ダンゴムシが!!紙コップについてる!!」とA児の大きな声が響いた。その声を聞き、周りの子ども達も急いで見に来た。そして、紙コップにたくさんのダンゴムシがついているのを見つけ、「うわ〜、いっぱいについてる!」「なんでついてるんやろう!?!」「先生、おかしいことになってるわ!」と、驚いた。「本当だね。初めて見たわ」と子ども達の思いを受け、一緒に驚きながら、子ども達同士のやりとりを見守る。

すると、B児が「なんか、動いてない?」と不思議そうに話す。周りにいた友達も、「もしかして、食べてる?」「ダンゴムシ、紙コップ食べてる!!」と、ダンゴムシが紙コップを食べていることに気づき、興奮気味に話し始めた。「どうしてかな」と子ども達の思いに寄り添い、一緒に考えることした。

よく見ると、飼育ケースに入っている2個の紙コップうち、1つにはダンゴムシがついていて、1つにはダンゴムシが全くついていないことを不思議に思った子ども達は紙コップを比べてみることにした。B児が「濡れてる方に、いっぱいについてるわ」と驚いたように言うと、A児は「濡れてる紙コップの方がおいしいのかな?ダンゴムシ、乾いた土嫌いやもんな」と、1つは乾いていて、もう1つは濡れているという違いがあるのを見つけた。「本当だね。こっちは紙コップは濡れてるけど、こっちは濡れてないんやね」と子ども達の意見をより、詳しく周りの子ども達に知らせた。その時、C児が「こっちは紙コップも濡らしたら来るんかな」と言い出した。それを聞いたA児は、「濡らしてみよう」と、もう1つの紙コップも霧吹きで濡らし始めた。

紙コップにダンゴムシがついているのを見つけ、初めての出来事に驚く。

絵本や図鑑などでも見たことのない新たな発見をする。

紙コップが濡れているものと乾いているものがあることに気付く。

自分たちの考えを試そうとした。

<反省・評価>

- ・紙コップをお家にしたいという思いをから、飼育ケースに紙コップを入れたことと、偶然、紙コップが乾いているものと濡れているものがあつたことで、図鑑や絵本では出合うことのない発見し、気付いたことや考えたことを伝え合うことができた。
- ・発見の中で、絵本や図鑑、4歳児からの体験を通して知っていることを互いに伝え合いながら、自分たちで予測を立てることができた。4歳児からの経験や体験の積み重ねることが5歳児になり友達と一緒に考え、自分たちなりの予測を立てて試してみようとする姿へとつながっていくと感じた。

【事例4】 5歳児 「どんな作品展にする?」 (10月)

- ねらい ○ 友達と共通の目的を見つけ、一緒に活動を進めていく嬉しさを感じる。
 - 自分の思いや考えを友達に分かるように伝え、友達の思いや考えを聞きながら、話し合いを進めようとする。
- (保育者の援助・環境構成____ 心がときめく姿_____)

心がときめく姿からの見取り

前日、作品展に向けて共同製作のテーマについて話し合い、遠足に行った『生駒山上遊園地』、『ドリーム21』のどちらかでしょうということになった。

「昨日、うさぎ組の友達と行った生駒山上遊園地か、ドリーム21のどちらかで作品づくりをしようっていうところまで決まったね」と

昨日の話を伝えた。A児が「昨日Bちゃんは生駒山上遊園地が嫌ってもんね」と言い始めた。C児が「でも、嫌って言っても決まらないと思うよ」とB児に伝えた。しかし、B児は黙ったまま何も言わない。「Bちゃんには、嫌と思う理由があるんだと思うよ。Bちゃんもこうしたいと思うことをみんな伝えたらいいんじゃないかな」とB児に寄り添いながら、気持ちを伝えられるように促した。A児も「どうしたいの？教えてくれないと、みんな分からないよ」とB児に優しく語りかけた。C児も「こうしたいって言ったら、みんなで考えれると思うねん」と、B児の思いに寄り添った。その様子を見守りながら、B児が話し始めるのを待っていた。

B児の気持ちを大切に、みんなが納得して進めたいという思いがある。

すると、B児が「ドリーム21も楽しかったから、作りたい」と小さな声で言った。A児が「じゃあ、一緒にしたら、いいやん。みんなのしたいことを合わせたらいいいんちゃうかな」と提案した。C児も「そうしたらいいやん。そしたら、もっと楽しいのになると思う」と笑顔で伝えた。自分達で話し合いを進めようとしている姿を見守っていた。すると、少し表情が和らいだB児は「プラネタリウムが楽しかったし、一輪車もしたい」と自分の考えを話し始めた。その思いを聞いてA児は、「プラネタリウムとか一輪車を生駒山上遊園地の中に入れるのはどうかな？」と提案すると、B児は笑顔で頷いた。「そうしたらいいやん」と周りの友達も笑顔で返した。「共同製作の名前は？」と子ども達に問いかけると、「じゃあ、ドリーム遊園地は？」と声が返ってきた。その声に「それいいやん」「そうしたら、楽しそう！」と子ども達から一斉に歓声が上がった。

A児は、B児の思いを大切にしたいと新たなアイデアを提案した。C児もこれなら、B児の思いとみんなの思いを大切にできると考えた。

名前を決めたことで作品展に向け子ども達のイメージが広がった。

<反省・評価>

- ・保育者がB児の思いに寄り添い仲介をしたことで、A児やC児、クラスの友達もB児の気持ちに寄り添い、話し合いを進めるようにした。その中で、互いの考えに刺激を受けながら、友達と一緒に共同製作に向けてアイデアがより膨らむことができた。
- ・日々話し合いの中で、自分の思いや考えを受け止めてもらえる経験や友達の思いや考えを聞き折り合いをつける経験の積み重ねが、5歳児後半になると自分たちで話し合いを進めていこうとする姿へとつながっていると感じた。

5. 研究の成果

- 4歳児の1学期は、友達と関わって遊ぶことが少なく、個々で遊びを楽しむ姿が見られた。保育者が面白さに共感しながら、子どもの思いや発見を言葉にしたり、うまくいかない時には一緒に考えたりして、気持ちに寄り添うことで安定して遊べるようになった。友達の姿にも気付けるように遊びを知らせたり、時には繋ぎ手となるように関わったりした。また、遊びの振り返りを繰り返してきたことで、少しずつ友達と繋がりが広がっていった。挑戦や葛藤する体験を繰り返し、保育者や友達に認めてもらいながら、喜びや満足感を味わうことが意欲や探究する姿となり、主体性も育まれていくと感じた。
- 友達の意見に同調する姿が多かったため、5歳児になり、話し合いの機会を多くもつことを大切にしてきた。自分の思いや考えを伝えたり、友達の思いや考えを聞き折り合いをつけたりする経験や友達の考えに出合っ刺激を受ける経験を積み重ねてきたことが、子ども達の自信となり次の活動への意欲につながった。友達同士の関りが深まり、友達と一緒に遊びや生活を進めようとするために、保育者は、子ども達がやってみたいという気持ちを受け止め、子どもの興味関心を見取り環境構成をしたり、友達同士で進めていけるようなタイミングのよい投げかけをしたりすることが大切であると感じた。

6. 今後の課題

子どもの主体性を視点においた話し合いを継続して行うことで、職員間で子どもの姿やそれに応じた援助や遊びの環境を共有することができた。一方で、環境構成のあり方について再構成を行う面については、より丁寧な考察が必要ではないかと省察する。

子どもの育ちの支えとなる遊びを展開するため、日々の中で子どもの姿を伝え合う機会をもつことを大切にすることが、小規模園ならではの保育を高めあえるクラス運営づくりにつながられるのではないかと考えた。

4歳児や5歳児がこうしたいと意欲的に遊びや活動できる、また、繋がることで生まれる楽しさが感じられる保育に取り組み、この園の良さを活かすことができるよう、より視点を明確にしてプラスにつなげていきたい。